「紀伊山地の霊場と参詣道」世界文化遺産登録記念

シンポジウム「奈良の元気な森林をつくるために」

（平成１６年７月１７日（土）　なら１００年会館（奈良市）

奈良県は、豊かな森林環境に恵まれています。森林は、私たちにこころのやすらぎを与え、また災害や干ばつから生活を守るなどといった大切な役割を果たす一方、近年荒廃が進んでいます。

こうした現状を踏まえ、森林環境を保全する幅広い気運の醸成を図る目的で、シンポジウムを開催しました。

【　プ　ロ　グ　ラ　ム　】

○開会のあいさつ　　奈良県総務部長　滝川伸輔

○基調講演　　演　題「多様な森を守る多様な取り組みを」

講師　田 中 淳 夫 氏　（森林ジャーナリスト）

○パネルディスカッション

テーマ「奈良の元気な森林をつくるために」

パネリスト

小 島 誠 孝 氏　（写真家・登山家）

更 谷 慈 禧 氏　（十 津 川 村 長）
田 中 淳 夫 氏　（森林ジャーナリスト）
中 島 祐 子 氏　（奈良県地域婦人団体連絡協議会会長）
日 比 伸 子 氏　（橿原市昆虫館学芸員）

コーディネーター

三 宅 道 子 氏　（キ ャ ス タ ー）

基調講演　要旨

演　題「多様な森を守る多様な取り組みを」

講師　田 中 淳 夫 氏　（森林ジャーナリスト）

ご紹介にあずかりました田中です。奈良県生駒市に住んでおります。森林ジャーナリストというちょっと怪しげな肩書でご紹介いただきましたけれども、実は自治会の役員もやっておりまして、今晩役員会がございまして、夏祭りはどうしなくてはいけないかということを話し合う予定であります。先程、出し物は金魚すくいにするべきか、食べるものは焼きそばか焼き肉かということを、裏でずっと考えていたのですけれども、そういう仕事もやっております。

さて、本日は「奈良の元気な森林をつくるために」と題したシンポジウムにお招きいただいたわけです。そこで、地元奈良の森林事情などを紹介しながら今後どうすべきかということを皆さんと共に考えてみたいと思っております。ただここで、奈良の森林とは何かというと、意外とはっきりとイメージが浮かばないのです。

私は生駒市に住んでおりまして、仕事場から生駒山上も見えるようなかたちになっているのですけれども、当然森といいますと、生駒山の森を想像します。秋になれば紅葉もしますし、うっすらとですけれども雪も降ります。新緑は非常に美しいですし、私は雨に煙る景色も割と好きで､仕事場からそれを眺めるというのもけっこう楽しめるわけです。

こういう森は、一般には里山とか雑木林と呼ばれるものです。もちろん竹林もありますし、その間の谷間には棚田が広がっているという田園風景を里山と呼んでいるのです。私の親戚がこの生駒山に山林を持っておりまして、私もそこで森遊びをやっております。「森遊び研究所」などと勝手に名前を付けております。デッキを建設したのですけれども、そこでたき火をしたり、キャンプをしたりとか、いろいろ楽しめますし、木登りもできる。どんぐりもよく落ちています。私にとって、そういう森こそ直接思い浮かべる奈良の森なわけです。

言うまでもないですけれども、奈良県は林業県です。今日、ここにお越しの中にもそういった林業家の方もいらっしゃるかもしれません。吉野林業といえば、もちろんすぐに浮

かびますけれども、南部には広大な人工林が広がっております。そこはスギとヒノキが主な針葉樹の森です。

ちょうど私が森林のことを勉強しようと思った時に、吉野の川上村によく通わせていただいたのです。そこで地ごしらえから植林・造林から下刈り、間伐、枝打ちなども経験させていただきました。そこで扱った森というのは、みんな人工林です。特にスギが多かったです。そういう森というのも奈良の森です。

特に吉野は、日本最古から造林をしたと言われております。その技術は、日本の林業の最高峰と言われているわけですから、これこそ奈良が全国に誇るべき森ではないか、「人工林こそ奈良の森だ」と言うこともできるかと思います。

一方で、奈良といえば、むしろ一般の方が思うのは、大仏、あるいは鹿ということになるのです。こういう古都のイメージで言う森林といいますと、やはり春日山の原始林は浮かぶのではないかと思います。これは世界文化遺産です。今回、指定を受けました紀伊山地の世界遺産も、いくつもあちらこちらに天然林あるいは原始林が残っています。

春日山の原始林で言えば、奈良の繁華街から歩いて数分で着く。これ自体も日本はおろか、世界的にも非常に珍しい状態の原始林です。という意味ではこの原始林こそが奈良の森だと言えないこともないと思います。

更に細かく分けると、いろいろなかたちの森がほかにもあると思うのですけれども、とにかく奈良の森といいますと、だれもが思い浮かべる森というのが以外とないのです。里山の、それこそ「棚田１００選」に選ばれた、明日香村のような田園風景を思い浮かべる方もいる。吉野林業の人工林の森もある。もちろん原始林もある。

では、いったいどれを指すか。そこから少し考えてみなくてはいけないと思うのです。今日お越しの方の中には奈良市とか生駒市など北部の方も多いかと思いますけれども、そういう方は、やはり身近な森といいますと、里山の森ではないかと思います。もちろん、林業関係の方は人工林でしょうし、登山とか旅行が好きな方、特に世界遺産にこだわっていらっしゃる方ならば、原生林のほうを思い浮かべるのではないかと思います。そこで今日は、これを順番に、種類別に、現状と問題点なども考えてみたいと思っております。

まず、「里山」です。実は、この里山という定義は非常に難しいのです。何をもって里山と言うか。あるいは、その中の森を指すか。一番狭くしますと、里に近い山の木の生えている部分だけという意味では、雑木林に当たると思います。しかし、ほかにも草原もあれば農地もある。道も小川もあります。河川敷とか砂地や裸地もあります。更に言えば、かやぶき屋根の家とか、そういう建築物も含めて里山の一部だと言う方がいます。森自体も雑木林ばかりとは限らず、竹林もありますし、人工林も一部にはあると思います。

ですから、里山というのはむしろ一つの自然のかたちではなく、全体を指す景観。ランドスケープを指すと思っていただければいいと思います。そしてランドスケープとしての里山というのは、いったい何が定義になるのだろうかということです。いろいろ意見があるのですが、一口に言ってしまうと、私は人が関与して、新たに生まれた自然環境と考えております。言い換えると人が作った自然です。

例えば、雑木林を思い浮かべれば簡単ですけれども、そこに生えている木は、クヌギとかコナラとかアカマツとかありますけれども、こういう木は、非常に明るい場所を好むのです。木がうっそうと茂っている所には生えてこない。人とかほかの自然環境条件でもい

いのですけれども、いったん木が全部なくなってしまった裸地になった所に生えてくる木です。しかも成長が早い。１０年もすれば、高さはもう５メートルぐらいになってしまいます。太さも１０センチ－２０センチになります。こういう木が生えている森を雑木林と呼ぶことができます。

その木の特徴といいますと、これは全部ではありませんけれども、だいたい落葉樹が多いです。落葉広葉樹。秋になりますと紅葉して、冬は葉を落とす。ですから、里山の山は、秋になると紅葉して美しいと言えるわけです。そして葉が落ちると、林床、つまり森林の下の部分に日光が差し込みます。日光が差し込めば、当然そこに草が生えます。草が生えれば、そこに付く昆虫も増えますし、それを餌にする鳥も、動物も来ます。そういうふうに、いろいろな生物が集まってくるという生態系を持っている森になるわけです。

お手元に配ったレジュメの写真を見てもらいたいのです。奈良県の森の写真は、この会場に入ってくるエントランスに展示してあるのであえて選ばなかったのですが、一番上の写真は、典型的な雑木林という意味で、埼玉県の武蔵野ですけれども、これは春先の写真で、葉があまり付いていないこともあって非常に明るいです。

成長が早いといっても、木の太さはそれほどない。大木はありません。高さもそれほどありません。言い換えると、若い森です。その代わり動植物の種類が非常に多い。これを大雑把に里山だと思っていただければいいと思います。この里山をしばらく放ってきますと、木はどんどん生長して大きくなり、葉も増えますと木の下は暗くなります。そうすると、草が生えなくなってくるのです。どんぐりは落ちても暗かったら芽が出ない。芽が出ても枯れてしまう。そういう意味では、クヌギとかコナラは生えないですけれども、その代わりに、暗い所でもよく育つカシとかシイの木が生えてきます。この木は、いわゆる照葉樹と呼ばれます。常緑広葉樹と言ってもいいかもしれません。要するに、葉が分厚くて、ツバキとかサカキとかタブの木を思い浮かべてもらえばいいと思いますけれども、けっこう黒っぽい森です。

こうなると、森自体が暗くなってきまして、そこに生息する生物も変わってきますので、もう雑木林と呼ばなくなります。一般には、ここまでいったら大雑把に天然林と言ってしまいます。それを更に放っておきますと、完全に人が手を加えた跡が消えてしまえば、もうほとんど原始林と同じか、原始林そのものになってしまう。そこまでいくのには何百年もかかることです。このように、同じ森といっても時間と共に変わっていく。これを遷移と言いますけれども、そういうことが分かっていただければと思います。つまり雑木林、里山というのは、放っておくと消えてしまうのです。

幸いといいますか、これまでの雑木林は、放っておかなかったということが言えると思います。一言で言えば人が常に手を加え続けておりました。木を切ったり草を刈ったりしたのです。でも、木を切るのは酔狂でやったのではなくて、もちろん木材を欲しかったからとか、あるいは炭を焼く。それと、それをまきにする。草を刈ったり、あとは枝葉を集めて堆肥にして肥料にする。こういう使い道があったわけですから、常に森を刈っていたのです。

森の大きな木を切れば、そこだけすっぽりなくなるわけですから、また森の中が明るくなる。そこでありがたいことに、クヌギとかコナラというのは切りますと、切り株からまた芽が出るのです。あえて苗を植えたりしなくてもまた新しい森が育っていく。もちろん、外から種子が飛んできて、あるいはどんぐりが転がってきて、そこから芽が出ることもあります。人が常に定期的に手を入れて木を切ると、常に明るい森が続いていたということが言えると思います。このように、人が森に手を入れたという意味では、これは人工林と言ってもいいのではないかと思っています。

特に、今、里山とか雑木林という言い方をしましたけれども、昔の言い方をすれば農用林と言うのです。農業に役に立てるという意味で、農用林というのが昔の言い方だと思います。もちろん、これは森だけではなく、棚田というか農地も同じですし、草原も同じです。放っておけば、草から木が生えて、また森に変わっていくわけですけれども常に耕す、常に草刈をする。小川も放っておけば、そのかたちで残りません。常に底ざらいをしたり、水路を管理していくという意味では、小川も人間が造ったものである。農地はもちろんですけれども、山も、森も、全部人間が造ったものだと言うことができると思います。

つまり里山の自然というのは、人が常に手を入れて作ってきたということです。それは奈良県の場合でしたら大和朝廷以降は続いていると考えられますから、もう千年以上、もしかしたら、縄文時代から考えれば何千年か延々と続いた森があるわけです。そういう言い方をすると、私は、日本最古の里山がこの奈良県にあるのではないかと思っております。

では、次は「人工林」です。これはあまり説明が要らないのではないかと思います。言葉の通り人が造った森です。主に木材を得るためということになります。スギやヒノキとか、マツ、カラマツ、北海道でしたら、エゾマツもありますけれども、主に針葉樹の木を植えて造った森です。もちろん、最近は特にはやっていますけれども、広葉樹の森もあります。ケヤキといった用材以外にも、ブナとかミズナラを植えるというのもあります。そういうのも人工林に入ります。

縄文時代の三内丸山遺跡に栗の木の人工林跡があるそうです。遺跡を掘り出すと、明らかに栗の木が整然と並んでいるという所がある。言い方を換えると、人間が造る森というのは、人の意思しだいで如何様にもなる。どんな森になるかを決められる森だという言い方ができます。

ここでちょっと触れておきたいのですけれども。人工林といいますと、保水力が少ない

とか、生物の多様性がないという言い方をされるのです。だから、人工林が嫌いという方も割と多いのですけれども、これは、はっきり言ってしまえば間違いだと思います。ちゃんと調べるとそうでもないです。人工林も天然林と変わらないほどの保水力があります。

ただ、例えば調査するときに、林齢がせいぜい１０年、２０年の人工林と、造林後何百年もたつ原生林を比べてみたら、原生林のほうが保水力があると言えるかもしれません。年齢が同じぐらい、１００年ぐらいの森になってしまうと、ほとんど変わらないか、あるいはデータによっては、人工林のほうが保水力があるという数字が出ています。

三重県の尾鷲の辺りの速見林業にある森の調査では、人工林の中で植物の数が２４３種見つかっています。それに隣接した天然林があるのです。これは特に広葉樹の森ですけれども、そこの植物の数は１８５種類。ということは、人工林のほうが生物種が多いのです。もちろん、今の数は植物の数ですけれども、当然、それに付随して昆虫や動物の数も増えます。

私が行った時も、実はカモシカとかタヌキの足跡がその森の中にいっぱい残っていました。そこで、写真を見てもらいたいのです。これ、二番手、真ん中の写真です。これは、速見林業の森です。大体こんな感じです。これはヒノキの人工林ですが、その下に広葉樹がけっこう生えているのです。山桜とかいろいろ生えています。カエデもありましたかね。ですから、秋になったら紅葉します。一番下はシダが多いのですけれども、こういうふうに２層、３層になった森ができています。しかも、生産しているのは尾鷲ヒノキですから非常に高級材です。

こういう森を造ることもできるのだと、これが人工林だと思っていただければと思います。私は、吉野でも林齢２３０年の木の伐採現場へ行って立ち会ったことがあるのですけれども、その時も、木を切っていたら上からムササビが飛んで逃げていったという記憶があります。つまり、人工林でもムササビが住めるということが言えると思います。

これを逆に言うと、造り方によっては非常に丁寧というか勤勉にやりますと、スギの木以外のあらゆる植物を廃除するという森もあります。それを一生懸命努力して造るような篤林家という方もいらっしゃるわけです。逆に言えば、ほったらかして全然世話を見ないという人工林もあります。そうすると、木が立ち枯れていて、もうブッシュになってしまっている。そして下には草が生えないから保水力もないし、生物多様性も低くなってしまう。

つまり、森林としては非常に問題があるわけですけれども、こういう山崩れを起こしかねないような人工林もあります。人工林というのも、一口に同じものではなく非常に幅があるということです。人の手の入れ方しだいで、如何様にも変わるということです。

さて、最後に「原始林」。春日山のは原始林と言いますけれども、一般には原生林と呼ぶと思うのです。これもまたあまり説明は要らないと思います。これは、今までの里山と人工林とは全く正反対に、基本的には人の手が入らない森ということになります。仮に何百年か前に人が伐採しても、時間がたつと共に人の手が入ったのが消えてしまったような森になる。そうすると原生林と言っていいと思います。だから大木が多いです。その代わり森全体も暗いです。大木の下は暗がりになっています。だから、林床、森の地面のほうには草があまり生えないような状況になっています。

その見本の写真を３番、一番下に持ってきたのですけれども、これは芦生の森です。非

常に大木があります。ここで勘違いしていただきたくないのですけれども、原生林というのは、一般には生物多様性が非常に高いとよく思われがちですけれども、今言った通り、あまり草が生えないとか、暗くなってしまって、明るい所に生えるべき木が生えないということになりますので、樹木の競争が非常に激しくなると種類が減るのです。

その結果としては昆虫も減ります。動物も減ります。例えば、蛍というのは原生林には住めないです。そういうことを考えると、生物多様性は必ずしも高いとは言えません。むしろ雑木林のほうが高いのではないかと思います。ただしこれは日本の森の話で、海外に目を向けますと、熱帯雨林などは非常に生物多様性の高い森になります。ですから、一概には言えませんけれども、原生林はこういう状況だと分かっていただいたと思います。

ただ、ここまで説明しながら何ですけれども、日本に原生林というのはあまりないです。ほとんど手の入っていない森というのはありません。せいぜい無人島ぐらいではないかと言われています。知床とか白神山地とか、屋久島もそうですけれども、ほとんど人の手は入っています。春日山の原始林も、調べれば入っているのです。秀吉が杉を１万本植えたという記録もあります。

最近では鹿が増え過ぎて、どんどん木を食べてしまうので植生が変わってきています。本来生えるべきカシとかシイの若葉を食べてしまうから枯れるのです。この鹿というのは、やはり人間が保護したから増えたという意味では、人の手が入っていると言えないこともありません。

もう一つ気になるのは、ナギの木です。春日大社にナギの木を植えています。これは人間が持ち込んだ木です。このナギというのは、葉は平たいのですけれども、実は針葉樹に属するのです。ちょっとにおいがするので鹿はこれを食べないです。そうするとナギの木は食べないから、どんどん広がっていきます。おかげで、春日山の中にどんどんナギが増えていくという意味でも、ちょっと本来の自然とは違う植生になりつつあります。

あともう一言加えますと、原生林といっても、何百年に一度はやはり変わっているのです。台風で大木が倒れてしまう。あるいは洪水でごっそり流される。山火事が起こる。こういうのは何百年に一回は確実に起こっています。そうすると、そのたびにそこに木がなくなるのですから、もう原生林ではなくなって、また雑木林と同じような木から生えていきます。

気候も変わります。温暖化すれば生えてくる木もどんどん変わっていくとか。あるいは、トチやブナなどは、湿潤でないと生えないのですけれども、昔は非常に湿潤だったのに、今は乾燥してきたから育たなくなるという現象も起こります。つまり原生林でさえもどんどん変化しているのだということも、ちょっと頭の隅に置いておいてもらいたいと思います。

これで大雑把に森林の種類とその特徴を見てきましたけれども、このことについては、このレジュメの下のほうに簡単に少しまとめるつもりで触れました。里山と人工林と原生林と分けましたけれども、本当はその間もありますので、天然林という言い方をするかたちでの、雑木林と原生林の間の部分も考えてもらいたいと思います。大体この辺りで、日本の森はほとんど含められると思います。

ここでちょっと整理したいのですけれども、里山と雑木林と人工林というのは、人間が造った森ということです。もちろん、そこの成り立ちの目的は違いますし、手の加え方も

違うのですけれども、基本的に人が造ったということは、人が手を加え続けないと維持できないということになります。逆に、今度、原生林の場合は、人の手が加わっていない森ということになります。とりあえず定義付けると、これが理想ですけれども、実際はそうもいかないということになると思います

さて、森林の種類を３種類分けたのですけれども、では奈良の森は、これら３タイプがどれだけあるかということを少し調べてみましたら、ちょうどいい図があったので、このレジュメの上の表を見てもらいたいです。日本の森林面積は、大雑把には２，５００万ヘクタールです。国土の６７パーセントが森に覆われています。うち、奈良県の森林面積は、２８万ヘクタールですから、１．１パーセント。これは意外と少ないです。日本の森の１パーセントほどしか奈良県にはないということになります。これは残念ですが、北海道のような所はどんとありますので、そこに取られているということになるのです。ただ県の面積は、実は日本の全体の１パーセント以下ですので、平均に比べると、奈良はやはり森が多いということになると思います。

統計の問題はあるのですけれども、はっきり統計があるのは人工林になります。全国で１，０００万ヘクタール以上、１，０３６万ヘクタールあるのです。率にすると、４１パーセント以上が人工林です。奈良県は６１パーセントですから、やはり全国よりも人工林率は高いということです。

ところが里山となると、統計がないのです。ここでは天然林とひとくくりにして中に入っていると思います。非常に幅の広い推計になるのですけれども、全国的に６００万ヘクタールから９００万ヘクタールぐらいの面積だと言われています。大体、森林の２．５割から３割というところでしょうか。

ただし、放置されるとどんどん変わってしまいますので、今では里山とは言えないとか、雑木林と言えないという土地もけっこうあると思います。原生林というのも統計上は天然林の中ですけれども、これはほとんど見当たりません。面積にすれば、恐らく全国では１パーセントか、それ以下ではないかと言われています。こういう天然林であった原生林というのは、ほとんどが国立公園特別保護区とか、原生自然環境保全地域とか、森林生態系保護地域とか、いろいろ法律上の規制がありまして、そういう網が掛かって保護対象になっている森ではないかと思います。

大雑把に日本の森、奈良県の森を概観させていただいたのですけれども、今日はここからが本題です。これらの森がどんな危機に瀕しているか、そしてその理由は何かということから考えていきたいと思います。森林の種類はさまざまなわけですから、危機の種類もさまざまです。何も「人生いろいろ」ではないですけれども、「森もいろいろ」であり、「危機もいろいろ」ということで、一概に「これだ」ということは言えません。

例えば、完全に森自体がなくなってしまうような開発という危機もあります。森があるけれども中身が劣化している。量はあるけれども、木の種類が減ったとか。あるいは、種類自体は減っているのだけれども、どんどん別の種類に変わっていっているとか、いろいろなかたちで変化してきています。木の量というより、むしろ本当は、生物多様性とかそういうものに焦点を合わせてみたほうが、その森林の健全度というのが分かると思うのですけれども。

では、先に分けた三つの森の具体的な危機は何かということを考えてみようと思います。

例えば里山の場合は人家に近い所にあるわけですから、一部はニュータウン開発とか墓地開発とか、道路建設というかたちの、いわゆる開発で破壊されていく部分があります。あるいは、小川も水路ということで、コンクリートで固めてしまうような自然破壊というものもあるかもしれません。ほかにも産業廃棄物の投棄とか違法建築とか、そういうかたちの危機がまずあります。ただ、これ自体は軽視するわけではありませんけれども、量的にはそんなにないです。

では、里山のうちの何パーセントがそういう破壊をされているかといったら、それほど多いものではないです。むしろ、量的に大きなものというのはやはり放棄です。かつては農業のために使っていた森なわけですけれども、今、農業は衰退とか、あるいは化学肥料を使うことになってしまって、雑木林が使われなくなっている。そうすると、もう必要ないからほったらかして、かつては１０年に１回とか定期的に伐採していたような森を伐採しなくなる。

そうすると、先程ちょっと言いましたけれども、落葉樹の森だったのにどんどん照葉樹に変わる。あるいは、農地も棚田を耕さなくなりますとどんどん草ぼうぼうになり、そこも森になっていく、竹が生えるというふうに里山はいろいろ変わってきています。そうすると、そこに住んでいた昆虫もいなくなります。動物も住めなくなったりもします。そういう意味での自然の変化というのも、やはり森林の危機の一つではないかと思います。

結局、生活が変わってきたという意味で、化学肥料を使って、堆肥を使わなくなった。あるいは、まきとか木炭は必要ではなくなった。シイタケは自分で作らずに中国から輸入するということで、どんどん里山を放棄して、破壊する方向に向かっているのではないかと思います。

では、次、人工林です。これも本当は理屈は一緒です。人が植えて、その後ずっと世話をしていかなくては思い通りに育たないのに、実は最近は林業では儲からないということで放棄が進んでいるわけです。人間社会でも言う、いわゆる養育放棄というような状況になっています。児童虐待と言えるかどうか分かりませんけれども。

人工林そのものは枯れてなくなるわけではありませんけれども、ちゃんと手入れをしないとどんどん質が低下していきます。吉野のように高級材を売り物にする場合でしたら、この質の低下というのは非常に致命的になるのではないかと思うのです。結果的には、林地の保水力も落ちますし、生物多様性も減っていくことになると思います。

もう一つ心配なのは再造林の放棄です。最近、木材の値段が下がったわけです。とりあえずそこにある木を切って売れば何とかお金になるけれども、その切った跡地にもう１回造林するお金はない。だから放っておく。切り捨てです。切ってほったらかしにするというのは、非常に広がっています。

奈良県の統計では見つかりませんでしたが、全国では何十万ヘクタールかあります。ずっと人工林だったのですけれども、本来は切った跡地に植林すべきところが、ほったらかしになって、今ブッシュになってしまっている。しかも、うまくいけばそのまま雑木林にな

ればいいのですけれども、周りが人工林に囲まれていると、クヌギとかコナラのどんぐりも何もないわけです。だから雑木林にもならない。単に草ぼうぼうになったりとか、ごくわずかの種類の木だけが生えているという森になったりしています。こういうのもやはり森林の危機の一つだろうと思います。

そして最後の原生林です。これは、人が手を入れると破壊されてしまうわけですから、手さえ加えなければいいのですけれども、妙なことに、原生林というと人が行きたくなるということがありまして、観光客が増える。今回の世界遺産というのも、その心配が一つあるのではないかと思います。

人が入れば、どうしてもその環境が破壊される。１人や２人なら構わないけれども、そこに１００人、２００人、更に１，０００人と入りますと、人が歩けばそこの地面が固まって、道ができると言えばいいですけれども、木が生えなくなる。草が生えなくなる。あるいはごみを捨てる。それも腐ってなくなるごみならいいのですけれども、大抵プラスチック、ビニール系のごみが多い。あるいはペットボトルとかが増えています。そういう森林破壊の危機もあると思います。

もう一つ、私の心配しているのは、移入種が増えていることです。移入種というのは、そこに本来いなかったはずの動植物が入ってくるということです。先程言った春日山のナギもその一つですし、ほかに有名なのはセイタカアワダチソウです。本来日本になかった草が外国から持ち込まれて、各地にすごく生えている。そういうことが日本の森にも広がっています。

池で言えば、里山のため池を見ますとブラックバスとかブルーギルがうじゃうじゃいるのです。私が遊んでいる生駒山の森でも、かつてはいろいろな種類の淡水魚をすくって遊んでいたのですけれども、今やもう残っているのはブルーギルだけです。

最近は、昆虫でもクワガタとかカブトムシは外国産が持ち込まれています。そして逃げたり山に放してしまうケースが多いのですけれども、もしかしたら、その外国産のカブトムシが日本のカブトムシと交配して、交雑といいますか、雑種ができてしまう可能性もある。そうしたら日本のカブトムシがどんどん減っていくという恐ろしさもあります。ほかにも害虫で、アルファルファゾウムシが入ってきたとかあるのです。

もう少し怖いと思っているのはケナフです。今、ケナフが何か流行っていまして、学校教育も使っているのです。ケナフを植えたら地球環境が救えるとか、二酸化炭素削減になるとか。そういうことはするけれども、これも実は外来種で、しかもすごく成長が早い。広がったら止まらなくなるということです。セイタカアワダチソウの比ではなくて、非常に危険な植物です。

だからへたに学校教材として使って、そのあと、その種をどこかにばらまくようなことがあったら、気が付いたら日本国じゅうケナフだらけになって、ケナフの森ができてしまうという心配さえあります。ですから、これを含めて原生林も里山も非常に危機にあるのではないかと思います。

さて、このように危機の姿を見てきたのですけれども、そうすると対処法もだいたい読めてくるのではないかと思います。里山と人工林というのは人の手を入れないといけない。そして原生林には人の手を入れない。これに尽きるのではないかと思います。原生林の場合は幸いといいますか、既に保護区が設定されているのがほとんどです。世界遺産という

かたちの保護区もあるかもしれませんけれども、いろいろな法律の網が掛かっています。あとはその法律をいかに順守してもらうか。観光との兼ね合いもあるのですけれども、既に日本のいくつかの所では入場制限を設けているような自然公園もあります。ほかにも、いかに移入種が入ってこないようにするか、既に入ってしまった移入種をどう廃除するかということも考えなくてはいけないと思います。

問題は、面積的に圧倒的に多い里山と人工林をどういうふうに守るかが、最大の課題ではないかと思っています。これも方法は簡単です。定期的に伐採する、草刈りする、間伐する、あるいは農地の場合は耕作する。ただ、これもだれでもできるかというと、そうでもなくて、やはり素人が手を出すとけっこう失敗も多いです。雑木林だから、伐りさえすればいいかというと、伐り方が悪かったら、伐り株から芽が出ないということもあります。農地も草刈りが大変だから、「じゃあ、除草剤をまいてしまえ」ということもあります。

人工林の間伐も、やはり技術が要ります。倒す怖さもありますし、伐り方が悪かったらほかの木まで枯れてしまったり、傷ついたら商品にならないという問題もあります。やはり、その整備の仕方を学ぶ必要があるのではないかと思います。

更に問題なのは、こういう整備をするには、やはり、何といってもお金と労力が要るということです。昔は日々の生活のためにそういう仕事をやっていたわけです。つまり森林整備をすることが自分たちの生活維持に役立ったし、収入源にもなっていたわけですけれども、今はそれはどうも難しくなってきた。まきで煮炊きする人はめったにいないでしょうし、国産材もなかなか売れない。だから造林もしないとなってきています。しかし、ここで今「儲からないからやらない」と言ってしまえば、森林は荒れるばかりで、にっちもさっちもいかないわけです。

今ここで森林のことを考えると、どうしても採算は度外視したようなことを考えなくてはいけません。でも、やはりお金は要るわけです。では、だれがお金を払うのかと。非常に重労働だし技術も要るし、もう少し専門職にお金を払わないと、だれもやってくれないという気持ちもあります。では、やはり公の県とか国に払ってもらいたいという部分はあるのですけれども、御多分に漏れず、奈良県も財政難ということです。

既に、奈良県というのは、補助金のかたちでも莫大なお金を森林につぎ込んでいます。林業予算は国と合わせると年間８０億円ということです。更に、それ以上のお金を払ってくれるかどうかというと、なかなか厳しそうです。多分払ってくれるのだったら、こんなシンポジウムを開かれることもないのではないかと思うのですけれども。

では、どうするのだということになると、今回のシンポジウムの趣旨にちょっと触れてきますけれども、「新しい税金を課して、そのお金で森林整備を進めようではないか」という発想が生まれてきているわけです。既に高知県では、去年から森林環境税というのを設けています。今年は４月から岡山県が同じものを設けました。どうも今年中、あるいは来年になると鳥取県、香川県、鹿児島県、愛媛県、岩手県などが同じような森林環境税に近いような新税を設ける予定だそうです。検討中は、奈良県も含めて３７都道府県あるということです。

しかし、これを言い換えると、県民にも負担があるということです。私も「森林整備はしなくてはいけない」と言っているのですけれども、奈良県民ですから、「新税がかかったら、自分の懐から取られるのはちょっと嫌だな。」と思っているわけです。やはりお金

を取られるというのは、抵抗のあるものです。新税の是非というのは、今後のあとのシンポジウムでパネラーの皆さんとも考えていきたいと思います。

最後にちょっとだけ触れておきますと、森林危機というのは、待ったなしの状態になっているということです。今ならそこそこ間に合います。でもあと何年かたつと、更に事態が悪くなって、大変なことになりかねない。ある意味で、銀行の不良債権処理と同じだと思うのです。バブル経済のはじけたあとに、すぐに不良債権に取り掛かっておけば、案外簡単だったかもしれないけれども、１０年、１５年ほっておいたために今一苦労しています。

ですから、森林もちょっと先延ばしと言っているうちに、どんどん広がって、もうにっちもさっちもいかなくて、手を付けるときには、必要な金額は１０倍にふくれ上がっているということもあり得ます。今、何とか処理しておかないと、将来に禍根を残すという気がしております。

また、今までどうしても環境の面からばかり言いましたけれども、私がちょっと気にしているのは景観の面です。例えば、里山が荒れると見た目が悪くなります。人工林もきれいに整備した間伐されたような森は非常に美しい「美林」という言い方をしますけれども、ほったらかしにしていると、どうにも見た目が悪くなってきます。見た目というのも、私はけっこう重要ではないかと思っているのです。

もちろん、日本人がずっとそういう景色を見ていたから、その精神構造にも里山の景色というか、人工林の景色というのは、けっこう焼き付いているような気もするのですが、それだけではなくて、汚いものは見たくないという気持ちもありますから、やはり森に対する興味が失せてくるのです。森に対する興味がなかったら、仮に開発で森林を違法伐採されてもあまり気にしない。あるいは、森の中に平気でごみを捨てても心が痛まない。貴重な動植物が絶滅したって気にしないとうことになりかねないと思うのです。

実は、ハイカーとか登山客がよくごみを捨てているという現象もあるのですけれども、きれいな森には捨てないです。暗くてこんもりした森にごみを捨てていくという現象が見られます。そういう意味での日本人の心の問題も含めて、何とか森を整備していかなくてはいけないと思っております。

さて、もう時間も来ましたので、あまりやるとシンポジウムの時間がなくなってしまうと聞いておりますので、これぐらいにさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）

パネルディスカッション　要旨

テーマ　「奈良の元気な森林をつくるために」

パネリスト

小 島 誠 孝 氏　（写真家・登山家）

更 谷 慈 禧 氏　（十 津 川 村 長）

田 中 淳 夫 氏　（森林ジャーナリスト）

中 島 祐 子 氏　（奈良県地域婦人団体連絡協議会会長）
日 比 伸 子 氏　（橿原市昆虫館学芸員）
コーディネーター
三 宅 道 子 氏　（キ ャ ス タ ー）

（司会者）
お待たせ致しました。それではただいまより「奈良の元気な森林をつくるために」と題しまして、パネルディスカッションを始めさせていただきます。議論のコーディネートは奈良テレビ放送で毎週土曜日夜９時から放送されている「ニュースＯＮステージ」のニュースキャスターとしてご活躍中の三宅道子さんに行っていただきます。それでは三宅さん、このあとどうぞよろしくお願い致します。

（三宅さん）
ご紹介にあずかりました三宅です。どうぞよろしくお願い致します。

今日のシンポジウムは森がテーマですけれども、今日はこのシンポジウムが奈良市内で開催されています。会場の皆様はどちらからお越しでしょうか。奈良県の南部からいらしたという方、いらっしゃいますか。前のほうに少しいらっしゃいます。となると、ほかの方は奈良県の北部、あるいは京都・大阪からお見えということでしょうか。

今日はほとんどが街にお住まいの方がお見えです。街に住む私たちはどうしたら森が守れるのでしょうか。今日は素晴らしい森のエキスパートにお集まりいただきました。今日は、どうしたら森を守れるか、今、森はどんな現状になっているのか、このことを中心にお話を進めて参りたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

まずは、先生方の自己紹介を兼ねまして、日ごろの森とのかかわりをご紹介いただきながら奈良の森林の魅力や重要性などについてお話を伺います。まずは中国の山からちょうどお帰りになったばかりです。写真家であり、登山家である小島さん、よろしくお願い致します。（拍手）

（小島さん）
どうも、小島でございます。こんにちは。よろしくお願いします。ちょっと座らせていただきます。私の場合は奈良県の山とのつながりといいますのは、写真を撮ったり、あるいは歩いたりということで楽しませていただいております。

過去、山をひたすら登っている時代を含めますとだいたい４０年余り奈良県の山とお付き合いさせていただいています。この間、山の美しい所ばかりを見て参りましたけれども、奈良県の山のいい所、美しい所はやはり水ではないかなと、突き詰めると水だという気が

致します。そしてその水が作った渓谷とか淵とか懸崖といったものが大変美しいと思います。

水が美しい、あるいは水がおいしいということは、取りも直さず森林が豊かであるということになるのではないかと。先程お話がありましたように、森林の土壌が大変豊かで、大峯山系でありましたら石灰質の土壌ですけれども、この岩盤を通じてのわき水、こういったきれいな水が魅力ではないかと思います。

ところが、このたいへん魅力的な森も、ここ１０年、森林が大変浅くなる、あるいは森が傷んできているという感じを持っております。例えば行者還岳の西側のトンネルから弥山へ向かいます道の途中に、弁天の森と言う所があります。ここはかつてはトウヒの原生林で､大台ケ原よりもはるかに美しいと言われたぐらいコケが地表に満ちていた所ですが、ここ６、７年の間にまだらになっております。そしてその先の弥山八経の鞍部では、かつては大峯の山の至る所で見られたオオヤマレンゲがほとんど見られなくなって、この一部フェンスに囲まれた所にしか見られない。こんな状況になっています。

これはなぜかといいますと、先程ちょっとお話がありました人工林です。これがある一時期国策で植林が大変進められたということもあって、人工林の新芽を食べる鹿たちをフェンスで閉め出した。そうすると鹿たちは当然上へ上へと仕方なく登っていく。そこで食べるものがなくなってきて、今までは食べなかった高山植物を食べたり、あるいはオオヤマレンゲを食べたといったことで、国の天然記念物であるオオヤマレンゲがほとんど絶滅に瀕しているという状況があります。

しかし、私はここで「人工林が悪い」と言っているのではないのです。人工林が傷めば当然のことながら、自然林も傷んで参ります。双方が立ち行かなかったら、両方とも駄目になるということがあろうかと思います。先程も村長さんとお話をしていたんですけれども、やはり人工林というのは、長い年月をかけて大変な資金をつぎ込んで育てていかなければならない。こういう難しい面があるわけです。そうしないと採算面が合ってこない。一般的には洋材との競争でどんどん追い込まれていくという側面がございます。

そんなことから私が思っておりますのは、山村経済の復興といいますか、経済の発展といいますか、そういったことに持っていかなければ、やはり森林の整備にも手が行き届かないと思います。そんなことで、あと、このシンポジウムの中でお話をさせていただきたいと思っております。以上です。

（三宅さん）

ありがとうございます。経済の発展のお話が今出ましたけれども、あとでもう少しそのお話を伺いたいと思います。

続きましては、昆虫がご専門の日比伸子さんです。よろしくお願いします。

（日比さん）

皆さん、こんにちは。日比伸子です。私は普段は奈良県中部にあります橿原市昆虫館で学芸員をしております。普段はほとんど子供たちと一緒に虫を題材に遊んだり、あるいは、なぜか私、お問い合わせとかで女性ファンが多くて、年配の方から若いお母さんまでいろいろな方とお付き合いさせていただいているのですが、会場を拝見致しますと、今日は紳

士の方がたくさんいらっしゃっていまして、こんなにたくさんの男性の方に視線を浴びるというのはめったにないので、今日は大変緊張しております。

さて、私は森林とはといいますと、まず一つは調査とか研究の場として常日ごろお付き合いをしています。先程のお話にもありましたが、奈良には非常に豊かな自然環境、多様性を持った森林がまだありますので、そこでの調査もありますし、それこそ、そこで千年にわたって脈々と人の生活があったわけで、聞き取り調査でいろいろな先人の知恵を学ぶというのが私の一つのテーマになっております。

もう一つは、橿原市昆虫館という博物館的な教育普及活動というのが非常に重要な場でして、それを実際に教育普及、あるいは癒しの場として提供していくことが最近の非常に大きな課題となっています。

私は、奈良の森林の重要性というのは、二つのキーワードがあるのではないかと思っています。一つは、先程から何度も言葉が出ております「多様性」ということです。もう一つは、「奈良の独自性」ということです。もちろん、奈良というくくりで言えるのかどうかは難しいんですけれども、私が昆虫館に入りまして、最初に扱った昆虫で水生昆虫があります。私は県内のため池をあちこち歩きまして、そこにすむ水生昆虫を一生懸命追い掛けました。

それは、最初はタガメとかゲンゴロウが非常に減っているということで、これを何とか救いたいという思いで始めたんですけれども、そういう水生昆虫を追い掛けていくうちに、実は面白いことが分かってきたのです。そういう水生昆虫は一つのため池で生きていると思っていたらそうではなくて、ため池とか、その横の田んぼとか、あるいはその横の溝とか小川であるとか、いろいろな環境を使い分けて、上手に暮らしていることが分かってきたのです。

そしてもう一つ副産物として面白いことが分かったのは、いろいろな田んぼがあります、棚田がたくさんあります、ところが、どれも同じ田んぼはないということです。ある田んぼではタガメが繁殖をしている。その隣の田んぼに行けばきっとまたタガメがいるだろうと思ったらこちらには１匹もいない。ここはイモリがいっぱいいる田んぼ、またその一番下の田んぼに行くと、今度はクロゲンゴロウがいっぱいいるといったふうに、実は田んぼ一枚一枚に性格があるというか変わっている、違うということに気付いたのです。

生態学のほうでは、最近いろいろなデータを使いまして、こういう地域には大体こういう昆虫がいるのではないかということを、非常に科学的に推理ができるようになってきました。しかし、一枚一枚の田んぼの違いなんていうのは、残念ながら科学ではまだ証明できません。

では、一枚一枚の田んぼは何が違うかというと、水は同じ水系で流れてきますし土も同じですが、ただ、それを作っている人が違うのです。ここはあるおじいちゃんが作っている。そのお隣は、お隣の若夫婦が作っていたりするわけです。非常にミクロな世界ですけれども、昆虫たちにもそういう違いがいろいろなことで出てきているということが分かってきました。

ところが、その村全体で見ると、その村にはタガメもいればガムシもいればクロゲンゴロウもいて、非常に豊かな里山環境だということが分かったのです。水生昆虫は生息環境が水辺ということで非常に限定されますので、調査がしやすかったんですけれども、恐ら

く同じことは森林でも言えると思うんです。この森はこういう虫にとってはとてもいい、その隣の森はこういう虫にとってとてもいい、そして全体として多様性は非常に守られている。一つ一つには個々の独自性があって、全体として非常に多様性が高いというのが、長年、千年にわたって脈々と人の生活が続いてきた奈良の森の面白さではないかと思っています。

（三宅さん）
はい。ありがとうございました。人の営みによって昆虫の生態も微妙に変わるんですね。橿原市昆虫館の学芸員である日比伸子さんです。ありがとうございました。後程よろしくお願い致します。
それでは続きまして、「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録されました。十津川も大変な喜びに沸いています。十津川村村長の更谷慈禧さんです。よろしくお願いします。

（更谷さん）
皆さん、こんにちは。十津川村長の更谷です。私が行政に入りまして、もう１１年になるのですが、それまでは家の仕事が林業なものですから、学校へ上がってからは山の手入れに行ったり、あるいは製材をしたりしていました。この１１年間、山に一番不まじめな男であると自覚をしております。この間も山に行ったのですが、自分の山の際面がここだったかな、ここだったかな。山に対して大変悪いことをいているなという感じを受けております。
十津川村は奈良県の最南端、奈良県の面積の５分の１を占めています。広さが６７２平方キロ、琵琶湖とほぼ同じです。淡路島に１市１０町あるのですが、あの島よりもまだ８０平方キロ十津川村のほうが大きい。そして村の９６パーセントが山林です。４パーセントだけが平地であったり、家があったりということでほとんどが山である。そういう観点で、われわれの村はこの林業、山によって支えられてきた、いわゆる林業立村であったわけです。
しかし、林業、木材の不況ということで過疎化、高齢化、少子化、そういうことが実際、今、進んできている。もっと言えば最先端を走っているというのが現状ですが、私は十津川の魅力というのはやはりもともとは山にあるんだな、そこから出てきたこのおいしい水とか、きれいな空気とか。特に今、７月７日に正式に登録になりました世界遺産のうち、大峯奥駈にしても３６キロ、あるいは大峯、熊野参詣道小辺路にすると７２キロのうちの２６キロがうちの村の中にある。
今までは、山が景気のいいころには、この世界遺産の道というのは山へ働きに行くための道だったのです。それ以前は１，０００年から１，３００年の昔を見ると、中央から人が入ってきたりとか、あるいは明治２２年のあの台風の時に大水害が起こって、被災者通っていった道なんです。この道は、まさにわれわれのこの村を支えてくれた道でもあるし、あるいは山でもある。そんなことで、私は十津川村に対して本当にほれています。しかしながら、今こういう現状の中でどうしたらいいのかということを、またあとから述べさせていただきます。

また、この山のおかげで村内に温泉が３カ所あるのですが、６月２８日に使いっぱなしで掛け捨ててしまうという、掛け流し宣言が村全体でできました。これはやはり天から与えられた恵みであるのですが、これは深い山が基にあってこそこうした本物の、また、みんなに体にいいんだという癒しを与えてくれるものができている。そういうふうに、まさしく山から恩恵を受けていると思って、これはますます手入れをしなければいけないという思いを持っているところです。以上です。

（三宅さん）

ありがとうございました。今のお話の中に、非常に癒しの場であるというお話がありましたけれども、この癒しを求めて私たちは山へ行くわけですが、１回行った切りですとどうしてもごみを捨てたり、あるいは山菜を根こそぎ全部採って、次の年には生えないといった問題が起きてきます。こうしたことを心配されて、皆さんの意識の改革・啓発を主に活動されています、中島祐子さんにお話しいただきます。よろしくお願いします。

（中島さん）

失礼致します。私は自分の小さいころの体験とか経験を生かしながら、今、次世代を担う若い皆さんに啓発・推進をしながら、特に環境教育・環境学習の場を何とか皆さんと共に作りたいということで、住民運動に取り組んでおります、奈良県地域婦人団体連絡協議会会長の中島です。

日ごろ、私は森林とのかかわりと申し上げましても、主に今取り組んでいる中心になるのは水問題でございます。私の父がたまたま森林関係の仕事をしていた関係上、小さいころには山にはよく行き、仕事を手伝っておりました。特に今も心の中に鮮明に、懐かしくと言っていいか、残っているのは、木の葉のふんわりとしたじゅうたんの上に座っておにぎりをほうばった。そして、谷川の水を手ですくってのどを潤した、あの美しさ、甘くてきらきら輝く水。そして、また、木の葉から伝わるひんやりとした温度と、カサカサと言う木の葉の触れ合う音。森と一体になって溶け込んでいくような安心感が子供のころに、その疲れた心や体を癒してくれたこと、そして溶け込んでいくような安心感を今も忘れることはなく、強く印象にに残っております。

そして、先程申し上げましたように、あと一つかかわりとしまして水問題に取り組んでおりますけれども、川の源流は山の渓谷であって、青少年の健全育成を視野に入れての環境保全実践活動に取り組んでおります。それも、大和川がワースト１という汚名に立ち上がったのがそもそものきっかけであって、その水の源流は森林というところから山はすべての人々の心の癒しの場所。春夏秋冬、山の移ろいと雄大な滝や小鳥のさえずり、また、豊富な食材、水、木材、燃料、肥料、地球温暖化防止等々、生活に必要なさまざまな資源が提供されているということ。それに対して伝統的な木の文化、山の豊かさを、森林の魅力をもう一度見直してみようではないかというかかわりを持っております。

特に、森林は自然を体感できる絶好の場所であり、自然愛護教育の基盤にもなるのではなかろうかと思っております。以上です。

（三宅さん）

はい、ありがとうございます。蛇足ながら、今、大和川のお話が出ましたけれども、大和川は残念ながら汚れは日本でワースト１です。ですが、過去の数値と現在の数値を見ますと、かなり改善されているそうですね。

（中島さん）
はい。私たちがこれに取り組んだのは、確か平成５年、６年ごろからだったと思いますが、その時の大和川の数値は１１．５か１２だったと記憶しています。平成１４年度の調査の結果では８ぐらいに数値は下がっていると思いますけれども、それでも悲しいことにはワースト１です。でも、全体的には、それぞれ皆さんの取り組みがあって、数値は下がってきれいになっていることは事実です。

（三宅さん）
はい、ありがとうございます。数値は下がっているけれども、日本全体ではまだワースト１ということで、ちょっと私たちが考えて実行しなければならないこと、課題もまだ残っているようですけれども、ありがとうございました。
さあ、今、子供たちへの教育も中島さんはお進めになっているという話がありましたけれども、同じように生駒の山で森遊びをしていらっしゃいます、先程ご講演いただきました森林ジャーナリストの田中淳夫さんです。よろしくお願いします。

（田中さん）
実は、先程ご紹介がありました通り、私は大学の農学部林学科出身ですが、はっきり言ってしまうと、その当時私は林業が嫌いでして、専攻したのは森林生態学で、特に動物のほうだったのです。それで取り組んだのがボルネオのオランウータンの生息調査をやりました。その後、大学卒業後も個人的にはボルネオにずっと通い続けておりました。興味を持ったのはやはり熱帯雨林です。熱帯雨林が非常に好きで、ボルネオのほかの所にずっと行っていたのです。
今から２０年ほど前、熱帯雨林の伐採反対運動というのが世界的に起こりまして、日本が非常に悪者になっていたのです。確かに熱帯雨林をどんどん伐採して危機にはあるんですけれども、そのほとんどが日本に来ていたのです。その原因は日本の森林問題にあると感じたのです。それで遅ればせながら日本に戻ってくるようなかたちで日本の森林について勉強を始めた。
そして、日本の森林問題は何ぞやと言って突っ込んでいくと、今更天然林だ何だではなくて、やはり人工林、つまり林業問題だと。日本の林業問題こそが日本の森林問題であり、それがボルネオほかの世界の森林問題につながっているのではないかとなりました。
そして今は、更にもう少し進みまして、林業問題というのは何かというと、これは山村問題ではないか。山村というか、その地域の問題ではないか。つまり林業という産業ではなくて、地域の問題として採り上げるべきだと思い出したのです。地域の問題というのは山村という、いわゆる田舎だけではなくて、都市問題でもあるのではないかというところに行き着いております。ですから、最近は建築などのほうにも顔を突っ込んではいるのです。一つ林業だ森林だといって決して途切れるものではなく、全部綿々とつながっている

のではないかと考えています。

ですから、例えば私も初めは科学的な面での森林生態学というところに入っているんですけれども、そうなりますと、今や、経済学とか社会学という分野にも顔を突っ込んで勉強しなければ全体を理解できないということです。「今、林業は苦しい、苦しい」と言いますけれども、その原因は何かというと、ここで言い出すとまた１時間しゃべってしまいますけれども、単純に外材だけの問題では決してない。いろいろ日本の社会構造の問題になってしまう。そういうことも考えていかなくてはいけない。

その一方で先程お話ししました雑木林、里山の問題もあるわけです。結局、人々が森と接するのがどんどん減っているのは実感しております。ですから、生駒山へ私が子供を連れて遊びに行くんですけれども、小学校低学年ぐらいまで娘もよく付いてきてくれたんですが、高学年になると来てくれない（笑い）。親としての悲しい面も少し感じてはいるのです。

子供たちが森に親しむきっかけとなる仕掛けを考えていかなければいけない。しかも、それも全部持ち出しでやっていくと続かないですね。１回やったら疲れて、２度目は嫌だという気持ちになるから。これは経済的にちゃんと成り立つ、何らかのシステムを作っていかなければいけないということも考えています。できればこういう環境教育もちゃんとした商売にできないかなと思いますし､林業というと決して木材だけを売るのではなくて、こういう広い環境教育、観光、あるいは林産物なり、そういうことも全部含めてもっと考えていくべきではないかと感じております。

（三宅さん）

はい。ありがとうございました。それぞれの先生の自己紹介も兼ねて、今、お話しいただきましたけれども、ただいまのお話で、奈良の森林がどのような状態に置かれているのかというアウトラインが大体お分かりいただけたと思います。

ここからは森林の荒廃が進むこの現状を、どのように打破していけばいいのかというお話を伺っていきたいと思います。

まず、田中さん、社会的な構造を変えなければいけないというお話でしたけれども、具体的にはどのようにすれば奈良の元気な森林を造れると、現状を変えることができるとお考えでしょうか。

（田中さん）

いきなり大テーマを振られてしまうと困ってしまうんですけれども、これをやったらという特効薬はないと思っているのです。例えば林業に関しても、木が安くて売れないというから､では補助金を出して､その分補填すればいいのかというとそういう問題ではない。そうすると産業構造がどんどん弱くなっていく。いかに強い外材と立ち向かう林業を築くかという問題になると思います。里山も今はもう雑木林が必要ない、あるいは棚田も効率が悪くて減反政策で耕すのをどんどんやめている。だからといって、だれかが代わりに耕してやり、自然を守るというものではないだろうと。やはり棚田や雑木林に新しい役割をちゃんと与えてあげなくてはいけないのではないかと思います。

例えばその一つは環境教育でもいいですし、逆にほかの作物を作る。水田は無理ならも

っと売れるものを作るでもいいですし、最近は棚田を牧場にするというのがはやっていまして、そうすると、牛や馬や羊などが草を食べてくれて、そしてその牛を出荷するとけっこういい金になるというのもあるのです。ほかにも全国各地であの手この手の新しい利用法は進んでいるのです。

林業も同じことだと思います。今まで日本の林業はずっと構造材、柱とかはりだけを売っていたんですけれども、それでは売れないだろう。だったらもっと売る商品を開発しなければいけないのではないか。そういう広い目で見ていかなければいけないのではないかと思っています。

（三宅さん）

小島さん、いかがですか。

（小島さん）

今、お話がありましたように、確かに林業全体の問題ということ。それから山村の発展というのは、私は単純明快、単細胞ですので、やはり基本的には経済の発展しかないと思っております。そういう意味で、私の持論といいますか、正しいかどうかは別にしまして、考えていることを述べさせていただきます。

１９９２年にリオデジャネイロで国連の環境開発会議と言うのがありました。これがいわゆる人類が生きていくうえでの行動の指針を作るということでやられたわけですが、ここで採択されたのは、いわゆる「アジェンダ２１」と言うやつです。その中の１３章の所に脆弱な生態系の管理と山岳開発がうたわれております。これを受けまして、２００２年には「世界国際山岳年」と言うのが制定されました。その中で発展途上国、ネパール、あるいは中国、ブータンと言ったような国々が、いろいろな森林開発とか、あるいは山岳開発に取り組んでいったわけです。その中で結局詰まるところは何だったかというと、経済の発展があってこそ初めて森林の保護、あるいは管理といったこともできていくというところに行き着いているわけです。

私は非常に単純に考えるので、日本の森林、あるいは山村の問題についても、詰まるところそこに行くのではないかと。先程税の問題が出ておりました。確かにそういった租税も必要でしょう。そして今、危機に直面している山林を保護していくことも必要でしょう。というのは基調講演のお話にもありましたように、やはり公共的機能を果たしているはずの、いわゆる洪水とか、あるいは簡単に言えば山崩れとか、そういったことを防ぐ、あるいはきれいな水を保全していく機能を持った山林がどんどん崩壊していくというのは困りますので、これは保護していかなければならない。両面をやっていかなければいけないのですが、やはり、それには経済というものを抜きには語れない。

そこで私が思いますのは、やはり先程お話がありましたように、紀伊山地の霊場と参詣道が世界遺産になったのをきっかけに、経済の発展ということを考えてはいかがかと思っております。ちなみに、この６月２４日から７月８日まで私は中国に行く機会がございました。これは自分の趣味で山登りに行ったわけです。そのついでと言ったら何ですが、ちょうどこのコンファレンスがありましたので、九寨溝、あるいは黄龍と言う、同じ四川省で、その中で１０時間ほどかかりますけれども、ここへ行った。「もともと林業で成り立

っていったこの九寨溝は、今、世界遺産で食べていっている。非常に発展している」というので、どんな実態なのか見てきたいということもありまして、見に行って参りました。

これは素晴らしい発展を遂げております。国家の指導ももちろんあります。合鎮企業からの資本金の投入もあります。しかしながら、村民たちが立ち上がってやっているのです。この山はおよそ３千メートルの高地にあります。そこにはバスが循環しているのです。そして自分が降り立ちたい所で降り立って、歩きたい所を歩く。そして帰ってくることができる。そしてその要所要所にはトイレが設置されています。このトイレたるや、遅れていると思いきや全自動なんです。しかも行きたいなと思う所に１０棟ぐらいずらっと並んでいます。そして入って用を足して出るとセンサーが自動的に働いて、便座のビニールがすーっとしぼんでいき、次の人が、新鮮に利用できるという仕組みになっていて、大変進んだ状況になっています。

しかし、この世界遺産、景観遺産になっているこの地域も、大峯と比べてどうかと見た場合、私は大峯山脈のほうがきれいだと思います。私が好きだから自己びいきで言っているのではなしに、本当にきれいだと思います。ここを利用することはできないのか。彼らももともとは林業で成り立っていたのですが、今や観光で成り立っています。１日の入山者が１万人。これをきれいに処理しています。しかも、ちり一つ落ちていません。行かれた方はご存じの通り、ごみ一つ落ちていないのです。徹底的に掃除されています。

果たして私たちの世界遺産である大峯山脈、あるいは小辺路。これがそういうふうにできるのだろうかと。現状を見ますと非常に問題がある。早い時期にこれを解決していかなければいけないのではないか。世界遺産への登録をてこにして経済の発展を考えていったらいかがかと考えております。私はそう思っております。以上です。

（三宅さん）

はい。田中さんのお話ですと、旧態依然の林業だけでなく、もっと新しい方法を模索しなければならない。小島さんはその一つとして、例えば「紀伊山地の霊場と参詣道」、これを商品として販売戦略をもってどーんと世界に売り込んで、経済発展をもって変えていかなければならないというお話でしたけれども、更谷さん、どのようにお考えでしょうか。５年後、１０年後の十津川村、あるいはご自分の理想としていらっしゃる十津川の発展をどのようにお考えですか。

（更谷さん）

たいへん大きな問題をお振りいただいたんですが、われわれは林業立村と言いました。林業という職業が、この環境とか自然というものを守ってきたと思うのです。今、この木材価格が低下してきたと同時に、環境の時代に入ってきた。温暖化はある、あるいは山の崩壊があるというちょうどもうこれ以上待てない、いわゆる崖っぷちではないのか。うちの村の歴史を言うと、幕末のころに京都の御所の護衛をしに３００人からの人が行った。その費用を捻出するために木をどんどん切って、それこそ山を裸にしてしまった。

そのあと、明治２２年に大雨が降って山崩れが起こって、北海道の新十津川町に新天地を求めて行った。その爪跡がいまだに残っている。乱伐をして地力の弱ったときに雨が降る、その状態が今あるのではないのか。先程言いましたように、うちの村で６万７千町歩

のうちの５１パーセントが人工林です。面積で言うと３万３千ヘクタールが植林地です。そのうちで１０年間まるっきり手入れをしていない山は３分の１の１万ヘクタールあるのです。

手入れをする人はするけれども、していない人はまるっきりしないというから、大体３分の１は手入れをしていないのではないか。捨て切り、間伐をしていないものですから光が山へ入らないわけです。ですからろうそくのように、上のほうにぽっぽっと葉っぱが付いているだけ。下のほうは草が生えないで真っ茶色になっている。これもう保水力が全然ないですから、また明治２２年のような大洪水が起こってくるのではないか。今そういう危機にある。

それと、今、京都議定書なんかで言われているように、ＣＯ２の問題、温暖化の問題がある。まさに森林の手入れをしなくてはいけない時がきています。実際、今、現実にうちの村の中で、３０年生までの間伐、３１年から６０年までの抜き切りを合わせて大体７００ヘクタールぐらいの整備に補助金をいただいております。これは感謝をしているのですが、この計算式でいくと、それこそすべて整備するには、３０年も４０年もかかるんです。だけどあと１０年もこのまま放置しておくと、それこそ山が崩れてしまいます。

今、村内にダムがいくつもあるんですが、ダムに堆砂する。その堆砂の原因はどこかというのは、確かにダムがあるから堆砂するのですが、もう一つは山が荒れて川に土砂が落ちていくことも大きな要因です。これ以上置いておくと、それこそ河床が上がるわけですから、村民の財産・生命というものが失われる。だからやはり今一番必要なのは、放置された山をいかに間伐をして光を入れてあげるかということだと思うのです。

先程経済の話をされましたが、今、実際、ほとんどが民有林なのです。個人の山なのです。皆さん、思いませんか。お金が入ってこないのに、自分たちのお金、今生活するのに精いっぱいでお金を出しますか。今までは何とか手入れをして、また植え返して山へお返しできるよということだったのです。これが今、１００年たった木が１石あたり千円か２千円です。十津川村では１００年たった杉が１ヘクタール、１００メートル四方の中で、１，５００石あっても３００万ほどです。こんな状態の中で、山を持っている者が手入れをしろと言ってもできないのです。

ですから、今補助金をいただいているお金でそれだけしかしていないのです。まだ足りないのです。先程言ったように３分の２もしていない。そういう現状です。そうすると大変なことが起こる。今、村では山に関心のある人たちが、山の状態をなぞらえると「Ｔ」だと言います。十津川の「Ｔ」なんですが、どん付きで前を見て行けない。これをなんとかしようといろいろなことを考えてくれます。

まさに今、環境の時代、国土保全の時代になってきたのならば、山主がお金を儲けるのではない、手入れをするだけの費用を何とか国、県、村、あるいは皆さん方に負担をお願いをする。地球規模で考えて、山林というものをお守りいただきたいと考えております。

（三宅さん）

村の９６パーセントが森林で、そのうち特に、いわゆる放置森林はどのぐらいの割合を占めるのですか。

（更谷さん）
人工林が３万３千ヘクタールあります。９齢級、１０齢級といった戦後、どんどん山に植えようと植えた時の木が一番多いんですけど、３分の１はまるっきり手入れをしていないです。

（三宅さん）
３分の１がまるっきり手入れがされていないとなると、今、私、林業の将来像を描いてもらおうと思ったのですが、それよりも急務として、まず、この真っ暗で手入れがされていない、危ない森林ですね。例えばこの間の新潟のような大雨が降りますと、たーっと崩壊する危険性のある森が今、十津川で１万ヘクタールあるということですね。これを何とかしなければならないという話ですけれども、もともと人工林というのは人が作った林ですから環境面でも随分影響があるのではないかと思います。この辺り日比さん、いかがでしょうか。

（日比さん）
今、本当に切実なお話を聞いて、それに対して何を言ったらいいのかなと思っていたのです。もちろんそれだけ荒れた山、森というのは生物層も非常に貧弱になっていきます。生物層が貧弱になるということは植物にも元気がなくなるということですから、結局生態系の中の自然な循環が成り立たないということです。いったん切れてしまった循環というのは、本当にどちらかにどんどん偏っていってしまう。で、何か大きなショックがあると、一気に崩れ去る可能性があります。ですから非常に危険な状況になっていますので、先程から話が出ていますが、放置林の手入れは本当に急務であると思います。

（三宅さん）
そうですね。中島さんは、水環境がご専門ですけれども、いかがですか。

（中島さん）
はい。今、お話を聞かせていただいておりますと、本当に水にしろ森林にしろ、ＳＯＳを発しているということを強く感じました。その中で、私はまず自然を体感、知覚の重要性ということで少しお話しさせていただきたいです。
私は実は大和川クリーンキャンペーンのポスター、絵画、作文、写真の審査員をしていますが、子供たちの作品の中から思わぬ感性を体得させていただくことがあります。大人が気付かないさまざまな自然のつながり、そして本当の豊かさ、優しさが子供たちの心を育んでいることを示唆しているように思います。
例えば、今、川は泣いている、ごみの山に出合ったという子供、川の中の生き物を通して命の大切さを知ったという子供、そしてだれが川を汚したかよりも、汚れた川を再生させることのほうが難しいと言った子供。また、「大和川、大好き」と、地域を愛する心が生まれるなどで、川を美しくするキーワードは子供、家庭であることを再認識させられました。と共に、こういった感動というものは一過性のものであるから、これを持続させるには更に１歩進んだ行動が大切ではなかろうかと思っております。

言葉では簡単に申し上げられますけれども、先程からお話がありましたように、目前に、あまりにも深刻な巨大な環境問題・経済問題等々の壁が立ちはだかっていることを私は本当に感じずにはいられません。

しかし、身近なところから環境教育を再考しようということで、まず森に出掛けてみる。大きな木の下で仰向けになって横たわってみてはいかがでしょう。森の音やにおいに気付き、木と対話する。また、あった木を見つけてスケッチしてみるとか。川へ出掛けるのも同じだと思います。水との交流が始まり、「だれが川を汚したの？」と言うより、持続可能な環境教育の再考を今は何よりも大切ではなかろうか。自然を愛し、大切にする心や美しさや気高さに感謝する心を知るためには、まず自然に接し、体感、そして自覚することの大切さが森を元気にする一助になればと思っております。

そこでちょっと事例ですけれども、川と森を核にして村起こしをした岐阜県の馬瀬村の話を少しさせていただきます。これは６年よりもう少し前になりますけれども、馬瀬村と言うのは人口が１，５００－１，６００の本当に小さな村です。馬瀬川と森林が一体化して、自然環境の素晴らしい地域であって、村作りの構想はインフラは最低限に抑え、ハード中心の村作りよりもソフト中心の村作りを考えたいというのは当時の村長さんのご意見でした。

当時の事業内容としまして、川と人の触れ合い、美しい山村景観の創出、情報交流研究会、清流環境の保全の四つの視点から成り立っていたようです。活動は地元森林組合や野鳥の会、釣り名人、水産業者、樹木医、河川関係者などを講師に村民対象に川のインストラクター講座を開催したり、人々が川に触れ合い、近付けるようなアプローチを作る。また、村内に点在する看板、例えば案内標識とか道路標識、民宿の看板等々も川や森の景観にマッチするようなシンプルな色合いに統一して、川や山々の眺望を良くしたということ。また、森の保水力を付けるために、道路や河川沿いの樹木の間伐や枝打ちなどを行ったということです。

本当に小さな村ですので行政主導型というかたちでしたが、これを今後は住民主導型の村作りにという理念を持っていらっしゃいました。何らかの参考になればと思いちょっと報告させていただきました。奈良県にもそれぞれの専門家がいらっしゃると思います。その辺の力をお借りしながら森を元気にするのも一考ではなかろうかと思いました。

（三宅さん）

はい、ありがとうございます。村民が、地域の人が中心になって森の保全活動を進めているというお話でしたけれども、十津川のお話を例に挙げますと、やはり民有林が多い中で、その森は地域の安全性にもつながっている、あるいは、地球環境としての環境にもつながっているということを考えた場合、みんなの力でこの森を民有林でありながらも守っていかなければならないという話になるわけです。森を守る行動として、今、中島さんがおっしゃった、例えば地域の人で汗を流して森を保全することが一つですが、それでは、街に住む私たちはどうしたらいいのかということで、先程田中さんのお話にも出ました、税金の導入という話になるわけですけれども、これに関してご意見を田中さん、もう一度お願いしたいのですが。

（田中さん）

一番面倒な税金の話になってしまうんですけれども。先程紹介しました森林環境税という考え方で、地方自治体が独自に課税するというのが今、全国にどんどん広がっているんですけども、実施したのは高知県と岡山県の２県です。岡山は今年からですから、実質的に分かるのは高知県だけになるのです。これは県民税に一律に課税するかたちですけれども、１年間の税収が１億４千万ぐらいになるのです。奈良県が同じようなかたちで仮に適用したら、せいぜい２億か３億、果たしてそれで何ができるのかというのを考えてしまうのです。

どうしてもこういう議論をしますと、森林が荒れているかどうか、それを守らなくてはいけないかどうかということで、その結果としてお金が必要だからといってこういう問題が挙がるんですけれども、使い道というのをまず考えなくてはならないと思います。先程言いました通り、奈良県で林業関係の補助金だけでも、だいたい年間８０億費やしているわけです。それでもなかなかうまくいかない。今言われた通り十津川村でもそういう状況である。ほかの地域全部を合わせていくと、人工林だけではなくて、更に里山を含めていきますといったい何十億あれば守れるか分からない。そこに新税をかけて２億だ３億だという新しい税収があって、何ができるのかなというのをどうしても考えてしまうのです。

まず、使い道を考えなくてはいけない。今までのように漫然と間伐補助金だ何だと言っていても、新しい税は作ったけれども、森林整備がほとんど進まない状況が続いてしまうのではないかなというのを危惧しているのです。ここでいきなり結論を言ってしまうとまずいんですけれども、では、どんな使い道があるのか。直接使うのがいいのか、あるいはちょっと古いですが、米百俵の精神のように、人材育成に使うほうがいいのかということも考えていかなくてはいけないと思います。

林業技術だけはなくて、例えば森林インストラクターとか、里山の整備の方法の技術の学校を作るというのも手でしょうし、いろいろな方法を考えないと、単純に、集めたお金を「さあ、森林整備につぎ込め」と言っても、これはちょっとらちが開かない。もっとこれはあまり浮かれずに兜の緒を締めて、もっと根っこから考えていきたいと思っております。

（三宅さん）

はい、ありがとうございます。小島さん、いかがですか。まずは地域の自立再生が大前提だというお話をいただきましたけれども、例えばこの税金の導入についてはどのようにお考えになりますか。

（小島さん）

今、お話がありましたように全く同じ意見です。税金の２億円は、確かに全体から見ますとごくわずかです。果たしてその課税する金額が２億円そこらなのか、それともそれ以上になるのかその辺の論議は別にしまして、それ以上大きな金額は他府県と比較してもできないだろうと考えますと、仮に決まったとしても、今、お話がありましたような金額に収まっていくのではないかと。そうすると焼け石に水と。従来のようなやり方ですと、いわゆる疲弊した所へちょっと補填してみる。それをただ単に、その場しのぎでやっていく

というようなことになってしまうのではないか。
　そこで先程言いましたように、まずは発想の転換をしていただくことも必要ではないか。かつて林業は、山にお金をどんどんつぎ込んでいってもびくともしないような大きな地主さん、あるいは山持ちさんが、７０年、１００年かけてやっていたのです。それが戦後の復興をきっかけに林業の育成ということで、どんどん伐採しそこへ新しく植栽していったということがあります。そこで新しい林業家が生まれているわけです。今、村長さんがおっしゃったように恐らくはその人たちが手入れができない、資金面でも問題があるというようなことになっていっているのではないかと思うわけです。
　そうすると、そういった森を放置して置いていいのか。これはできないわけです。というのは先程言いましたように、水源かん養林とか、あるいは防災林という機能も果たしているわけですから、これを何とか守っていかないといけない。その両面をやっていくにはやはり経済再生しかないということを私は考えております。ですから税の賦課をする前にもう一度踏みとどまって、何か方法はないのかということを全体にわたって討議する、詰めていくことが必要ではないか。そのうえでコンセンサスを得てやむなしということであれば、税もやむなしと考えます。

（三宅さん）
　はい。他府県の例で見ますと、この森林のための目的税は、１人当たりにしますと大体３００円あるいは５００円ぐらいという金額です。それにしましても、今までの大きな流れの中で今、方向転換の時期に来ている。この税金の投入以外に何か方法があるのか、もう一度討議する時期に来ているというお話でした。ありがとうございます。生活者の目からご覧になって中島さん、いかがですか。

（中島さん）
　現在私の弟は、父の跡を継いで山林関係の仕事をしております。それで今の状況を聞きましたところ、まず、外材の輸入等と共に材木価格が暴落したので売れない。住宅事情が変わった。いわゆる座敷がないので床柱も売れない。そして農業が機械化したために、２、３０年の若い樹木ですが、いわゆる農家でカコとかハデアシとして使っていた分は全く売れない。それと、植林をしても鹿が全部食べてしまうので、今は全く植林はしていないということです。それに、若い労働者がいなくて高齢化が進んでいるし、手入れをしても先行きの見込みがないということで、全く本当に困ったという状況だという話を聞きました。
　私もあまり難しいことは分からないんですけれども、植林した樹木が成長をし、森林を形成するようになるまでには早くても２０年、３０年以上の時間が必要で、成果が出るのはその人の１代、２代目ぐらい、本当は、１００年はかかるということを聞いております。しかし、だれかが森林を維持していくことを始めなければ、ただ時間が過ぎてしまうだけと考えれば、新たな課税も必要となってくるのではなかろうかと考えております。

（三宅さん）
　はい、ありがとうございます。日比さん、いかがですか。

（日比さん）

私も田中さんはじめ、意見は一緒です。本当に奈良の宝物であると言ってもいいような森林を守っていくために税金を払いましょうと、集めるのは意外と簡単ではないかと思うのです。そういうコンセンサスは得やすいだろう。ただ、実際にそれをどう活用するかというのは、非常に重要なキーポイントになると思います。

例えば森を造るというのは、私自身は森造りは人づくりであると考えています。では、森を守っていくためにはどういう人たちがかかわっているのかを考えましたら、まずは更谷さんみたいに地元で、本当にいつでも森に触れる所にある距離で守っていく地域の住民さんはいらっしゃるわけですね。

ところが、先程ちょっとお話を伺っていたら実際には、皆さん、普段森に行く機会はなかなかないというふうになっている。そういう生活様式になってしまっているわけです。それを何か新しいシステムとか新しい仕掛けを作って、子供たちからお年寄りまでが森に通って、森を慈しむような仕掛けを何か作っていく必要があるだろうと。でもそれは地域住民だけでは無理で、ではどういう応援団が要るんだというと、多分私たちのような週末リピーターみたいな感じです。週末に通ってそういう森を守るのも手伝うし楽しむのも手伝う、そういう応援団が要るのではないか。

更には、そこの森から出てくるきれいな空気であるとかおいしい水であるとか、あるいは安全であるとか、それからその森から生まれる生産物を使う、今度はもう少し遠方の方々、季節的に訪れるような季節ビジターとでも言いましょうか、そういう方々が更に裾野を守って盛り上げていくというような､恐らくそういう３層ぐらいの方式のシステム作り、あるいは仕掛け作りを考えていって、その中でお金を上手に使う。

今、いろいろなかたちで奈良県内でも自然関連でＮＰＯとか、市民団体はいろいろな活動を個々に一生懸命にやっているわけです。そういう方々をうまいことネットワークを作って、長い目で見ていい森を造っていく何か仕掛けが必要であって、そのために税金を使っていくのであれば、何かいい方策が得られるのではないかという気がしています。

（三宅さん）

はい。小島さんが先程税金の投入の前に、もっといろいろ考えることが必要ではないかとおっしゃいましたけれども、今の日比さんのご意見の中に参考になることがあったような気がします。ネットワークを作って、もちろん民有林もありますし、いろいろな人の持ち物ではあるんですけれども、全体として考えた場合に、やはり森は私たちの財産ですから、その共通な財産として守っていくために、ネットワークを作って何かできる方法があるのではないかというお話を今いただいたように思います。

会場の皆様はどのようにお考えでしょうか。私は町に住んでおりますけれども、町に住む私たちが考える以上に南部の森林は切迫した状況で、今この危ない状態を何とかしなければならない。それにはどうしたらいいのかというお話を今それぞれの専門家の、エキスパートの方にお話をいただきました。お時間はまだもう少しありますが、それぞれの先生方、これはちょっと言っていなかったということがありましたら、ぜひお願いしたいのですが、では、田中さんからお願いします。

（田中さん）

では、補足説明的に付け加えたいと思っているのです。先程から安い外材が入ってきて国産材が駄目になったというようなニュアンスの言葉もありましたし、恐らく会場の方もそう思っている方が多いのではないかと思うのです。日本の林業が傾いたのは外材のせいであると悪者を作ってしまうのは楽ですけれど、実はそれは間違いです。今、外材よりも国産材のほうが安いです。もちろん吉野杉のようなものは高い役物ですから別ですけれども、杉の並材は外材より安いです。それでも売れない。なぜ売れないのかということを考えていかなくてはいけないのです。

先程からちょっと話が出ましたけれども、床柱は住宅事情が変わって要らなくなったから売れない。当たり前です。時代がどんどん変わっていくと建築様式も変わります。必要とする需要も変わります。だから、本来はそれに合わせて国産材で売れる商品を作るべきだったのですが、作らずに昔ながらの床柱や建築材を作っていて、今、「売れない、売れない」と言っているわけです。

同じことがほかにもあると思うのです。私は仕事柄全国の山村とか林業関係、あるいはＮＰＯも含めてかなり歩いているつもりですけれども、非常に独創的なことをやっていらっしゃる方が多くて、実はこのご時世でももうけている林業家はいます。ほかにも実にお金を潤沢に動かせるＮＰＯもあります。いろいろのアイデアがあり、新しい商品開発をしたり、それこそネットワークを作ったりいろいろとやっています。

でも残念ながら、例えばそういう事例が仮に九州の１カ所であっても、そのことは東北の人は知らないのです、近畿でも、吉野の一部の人はやっているけれども、集落が変わったらやらないとか、そういう状況が起こっています。つまりこのご時世なのに残念ながら情報が行き渡っていない。また、同じ努力をしていないと言ってもいいかもしれません。ちょっときつい言い方ですけれども、あまりにものんびりし過ぎているのではないかと思います。

だから、これから改善していく手はいっぱいあって、そのアイデアなりその萌芽は全国に散らばってあります。それを発掘して、それを持ち込んでうちの村でもやってみようかということがあってもいいですし、いろいろな新しい林業施策もあります。学者も新しい施策を提案もしています。それがすべて正しいかどうか分からないんですけれども、試みる価値はあるのに、そういうことを知らない人が多すぎる。「あそこではこうやっていますよ」と私が取材ついでに伝えても、「ふーん」で終わっているのです。「うちもそれを早速まねしてみよう」というふうにはならない。そこに問題点があるので、それをつなぐような情報ネットワークなり情報センターを作って、そういう新しい施策、あるいは商品開発ということをやるきっかけを提供することがまず必要ではないかと思っています。

このことが先程から言っている経済発展の問題も含めてすべてにつながってくると思うのです。商売のネタは山ほどあるのに全然やらない。私は農林業ほどこれから日本で宝の山になる産業はないぞと、これで起業しなさいと周りから言っているんですけれども、なかなかそうはいかないようです。あまりここで大風呂敷を広げるのも何ですけど、今の林業というのは非常に不況ですけれども、チャンスもいっぱいあると思います。ちょっとした工夫によって大もうけした人も実際にいます。ぜひ、挑戦する人が現れてほしいと思っております。

（三宅さん）
はい。ちょっと視点を変えて見ると、宝の山だということで、林業から更に発展する道があるのではないかというお話ですね。ありがとうございます。小島さん、いかがでしょうか。

（小島さん）
今、私の言いたいことをほとんどおっしゃっていただきました。経済発展ということでくくりましたけれども、いろいろな産業の、先程から言われています床柱がうんぬんとか、いろいろな話がありますけれども、やはり素材の開発とか、あるいは用途といったものは技術革新によって大いに変わっていきますし、これからどんどん変わっていく可能性があるわけです。
そんな中で、やはり開発、あるいは新しい産業を見つけていくということへの視点の転換、そういったことによって新しい商売、平たく言えば商売ですね。そういったことをどんどんやっていくことが本当に大事ではないかと思っております。単純に言えばそういうことです。

（三宅さん）
はい、ありがとうございます。中島さん、お願いします。

（中島さん）
先程から環境教育・環境学習の推進ということで言っておりますが、それにプラス、今、奈良県が推し進めている道徳教育活動というのをプラスしていきたいと思います。これは美しいものに感謝する心、正しいことを正しいと言える心、生命や人権を大切にする心、自立する心や責任感、思いやりの心、共に生きようとする心を基盤にして、地道に努力することが大切ではなかろうかと思います。
現在、各地域とか学校等で行われている環境教育は気付きの段階で終わっているのがほとんどだと思うのです。関心を持つ、気付く、なぜだろう、それによって理解をし、調べる。調べると、なるほど、それをどうしたらよいのか。では実践しよう、みんなでやろう。そして私たちの家庭で何をすれば、地域の人にどう働き掛ければよいのか、行政に何を手伝ってもらうべきか等々をみんなで考えて、地道に努力することが一番望むことでありまして、そうでないとこの環境問題等々の解決には絶対ならないと思います。

（三宅さん）
はい、ありがとうございます。そして、十津川を愛してやまない更谷さん、税金投入のお話も含めましてご意見をお聞かせください。お願いします。

（更谷さん）
先程現状の話をしました。実際今１ヘクタール捨て切りをするのに、ざっとですけれども、大体１５万ぐらいかかるのです。今、実際うちの村でやっていることは、それを森林

組合へお願いをしてその山を手入れしてもらう。そこに大体１０万ぐらいの補助をいただけるのです。

だけど、山主に補助金が入ってくるのは１年後です。１５万の金をそのまま出さないといけないわけです。その金を出すだけの余裕がない、力がないというのが現状です。うちの場合、補助金が入ってくるまでの間基金を取り崩して、それを１年間だけ立て替えておこうと、補助金が入ったら相殺しようというかたちです。そうすると山主が自分のお金を出さないでも、実際出すんですけれども、その幅が小さくなるほど、山を手入れしていこうという思いになるんです。この立て替え金だけでもいい、そのお金を、その原資をどうやって集めるのかというのが、まさに私は今の皆さん方にお願いをしようとしている税金にならないのかと。これは山を育てるというのではなくして、環境、あるいは健康という名目の中でその税というものの使い道をしたい。

また、実際今、山で働く人がいないという。そこで働く人たちに働く場を与えることが過疎化からの脱却につながるのではないか。そんな思いの中で、今、田舎のほうは切り捨てられようとしていると言ったら口が悪いかも分かりませんが、やはり中央、中央へと行っている世の中で、国民はやはり癒しの中でほっとするふるさとのような所を今、求めているのではないかと。そういうふるさとを造る意味からも、そういう税の負担をぜひともお願いしたい。

もう一つ、先程「もっと新しい需要を開発しろ」という話だったのですが、私も山をやっておりますので、今、板の間の部屋を作たのですが、ふし物で、その板の厚みを４．５センチにしたのです。普通は六分板とか五分板を張って、その上にコンパネとかフローリングを張るんですが、そういう分厚いものを使えば、確かに今、この暑いのにその部屋はひんやりしています。冬はぬくいのです。

日本中に日本建築を教える大学というのはそんなにないのです。ほとんど鉄筋コンクリート建ての建築家ばかりだという。今までは内地材は高いという思いがあったのです。だけど、本当は木は安いんだよということをＰＲしていくことが必要ではないのかな。そんな思いもしております。

（三宅さん）

はい。１ヘクタール整備するのに１０万円から１５万円かかるというお話ですね。ですから生き残りを懸けてほかにも方策があるのではないか、などいろいろなご意見をいただきました。日比さんは、どうお考えでしょうか。

（日比さん）

今までも既にいろいろなご意見が出ておりますので、私はそれに付け加えるというかたちで。先程も申し上げたんですけれども、森づくりというのは人づくりだと本当に私は思っていまして、人をつなげていくということが大事だろうと。また、更谷さんがおっしゃっているように、森を守るのは切実な問題だということは、結局はそこに住む人を守るのも切実な問題であろうと思うのです。

それは結局、森からいろいろな知恵を授かった知恵のある人、達人・名人がいらっしゃるのに、その人たちを本当に今守らないと守りきれないのではないかという、私はそうい

うふうに聞き替えているわけです。ですから、森を守ると同時に森の知恵を伝承して、次の世代に伝えていく。それを生かしながら伝えていくという仕掛けがすごく大事だろうと考えています。

（三宅さん）
はい、ありがとうございました。会場の方はどのような感想をお持ちでしょうか。今日の討論の内容に際しまして、特にこの先生にこういう質問がある、あるいは感想があるという方、いらっしゃいましたらご発言いただきたいと思います。

（発言者①）
橿原市から参りました○○と言います。生まれ育ったのは吉野郡下市町です。実家ではスギあるいはヒノキを素材にして割りばしとか、あるいはアイスキャンディーの棒、おひつ、塔婆をつくっていました。今住んでいる橿原市に移り住んでからもかなり年数はたっていますけれども、やはり自分のふるさとである吉野の山が荒れているいることを、聞くにつけ、あるいは見るにつけ非常に心を痛めているわけです。
私も十何年か前に連合の前身である奈良総評の役員をやっておりました。奈良県の林業対策委員会などの場で、いろいろと教えていただきました。森林の問題や林業の問題について私なりに勉強もし、また、いろいろと考えるところもあって、今日、この催しに待ち焦がれて参加させていただきました。
先生方は、森林は社会的資本であるという認識のうえに立って、空気の問題や水の問題はやはりみんなが考えていかないといけないと言われていると思うのです。私は以前からやはり社会的資本であればそれを守り育てる人材をどうしていくのかということを真剣に考えておられるのかどうか。
現在、山林労働者がいったいどういう状態になっているか。恐らくは６０歳以上になっていると思うのです。下刈りはもちろん、枝打ちや間伐はできないと、先程先生が言われた通りです。そういう後継者をどう育成されるのかどうか。公務員にすべきではないか。賛成・反対は別として、やはり国の安全を守るために自衛隊が必要だ。消防や警察は国民が安心して安全な地域社会に住むためにある。そうならば、森林林業は空気や水の問題だから、国が、公務員がそれに従事すべきではないかと。
それから税金の問題です。緑化基金というのがあるわけです。１世帯５０円を町内会で取っているわけです。緑化基金との関連でどうお考えになるのか。
あるいは、世界遺産に選定された熊野・吉野の山並みをどう守っていくかという観点に立った新しい方策を後継者の問題も含めて検討すべきではないかと思います。以上です。

（三宅さん）
はい、ありがとうございます。林業の人材育成、後継者の育成ということに絞らせていただいてよろしいでしょうか。どなたにお伺いしましょうか。更谷さんか田中さんでしょうか。更谷さん、ではお願い致します。

（更谷さん）

はい。おっしゃる通り後継者育成事業というかたちで進めております。私も森林組合長をしておりました時に、１年に３名、２年間で６名の方を採用しました。採用の仕方が「Ｂ－ｉｎｇ」と言う就職情報誌にお願いしたんです。というのは、地元にいないということです。そうすると、１年目３人採用するのに８０名の方が来てくれたのです。２年目も６０名ぐらいでした。人も必ず住み着いてほしいということで、大体３０歳ぐらいの方で奥さんを持っておられて、子供が１人ぐらいあったらいいねという、こちらの勝手な思いでしたのですが、来てくれました。

６名で、現在４名残っております。私も８０名の方と面接をさせてもらったのですが、その方々の話を聞くと、都会で汗をかこうと思えばスポーツジムへ行かないとかけない。お金をもらって大自然の中で働けるのは、こんなうれしいことはないという人、いわゆる山が好きだという人もおりました。今、住み着いていただいておりますが、地下足袋も履いたこともない、鎌も持ったこともない人が来てくれたのです。それでも、今、きっちりやってくれています。

私は先程からも言ったように、やはり安定をしないと来てくれないのです。吉野というのは雨が多いです。１日の日当がなんぼ高くても、月に２０日も絶対働けないです。冬になると山へ行けない。そんな中で、やはり生活の安定を、ぜいたくはできないけれども、普通に生活ができる保障というものは当たり前のことだろうし、そういうことをこれから先も続けていきたいということです。

（三宅さん）

はい、ありがとうございます。いわゆる「Ｉターン」というかたちで都会から後継者が入ってきているという話でした。ほかにご質問、あるいはご感想がある方、お願いします。

（発言者②）

私は橿原市から参りました○○と申します。東吉野村出身です。先程田中先生のお話の中で、林業家があぐらをかいていたということがありました。確かに吉野ブランドということであぐらをかいていたということは事実であります。しかし、すべての林業者にベンチャー企業のようなことを求めるということは不可能だと私は思うのです。先程、森林というのは社会的な資本だと、社会財だということをおっしゃったけれども、その通りであります。そのために、政治はどのような責任を果たすのかということをわれわれは求めていかなければならないと思うわけです。

十津川の村長さんが実態をいろいろ話をされたわけですけれども、今日のパネラーの中に実際に林業の経営に携わっておられる方がいないということは、私は大変不満であります。そういう意味で、やや、田中さんや小島さんの発言に違和感を感じております。

さて、具体的な問題として、例えば放置林の問題がありますけれども、これはすべて、今手を入れても良くなるとは私は思えないわけです。戦後の拡大造林の中で猫も杓子も雑木林を切って、杉・ヒノキを植えたわけです。しかしながら、果たしてそれでよかったかというと、今はそのツケが来ているわけです。例えば、思い切って川や渓谷の周辺は広葉樹に返すとか、あるいは尾根筋や標高の高い所は人工林を植えても仕方がないわけでして、

それを今度は広葉樹に替えていく。そのためにかつて拡大造林のために誘導的にたくさん資金を出したわけですけれども、今度はそういう方向に資金を一つは出すということも考えなければ、ペンシル山みたいな所は少々手を入れても良くならないのではないかと私は考えております。

それからもう一つ申し上げますが､材木にはやはり需要がなければいけないわけですね。最近、奈良県の中にも吉野の杉や土壁の家を建てようということをやっておられる設計者や工務店のグループがあります。あるいは近くの山の木を使って家を建てようという全国的なネットワークもある。

自然の木を使った家を建てる。例えば１例を挙げますと、山形県の金山町と言う所では「金山杉を使って金山住宅というものを建てれば補助金を出します」というわけです。そういうふうな誘導ということも必要なわけです。

それからもう一つは、私は木を燃やさなければならないと思います。つまり、具体的に言いますと、木質発電になるということも考えなければならない。

近畿地方でも一番遅れているのは奈良県だということを、吉野の林業者は異口同音に言うわけです。だからそういう点では、私は自助努力はあるけれども、政治の責任を県はもっと果たすべきであると思います。以上です。

（三宅さん）

はい、ありがとうございます。それでは田中さん、お願い致します。

（田中さん）

幅が広いのでどれを答えようかと思うのですけれども、最後に言われた木を燃やすという話がありましたが、私の本に「伐って燃やせば『森は守れる』」と言う本がありまして、今から５、６年前に出して、いわゆる森林バイオマスで発電をしていこうというのを本に書きました。最近それが急速に盛り上がったので、世の中が追い付いてきたなと自画自賛しているわけです。

本当に進んでいます。私も実は一枚かんでおりまして、大阪のＮＰＯと組んで里山バイオマス研究会と言うのをやっております。それの取材というか研究も含めて来週、新潟県に行ってそのためのボイラーとかも見に行くのです。確かに一つの可能性としてはあります。ただ、やはり採算性で言うと非常に難しい面があります。里山という雑木林ですけれども、ほかにも林業廃棄物とかを燃やして、それを発電にしようという、木材発電構想というのも今、日本全国で広がっていますけれども、奈良県もあることはあるようですね。ただ、具体的にやろうと思うと、やはり採算性にかなり問題があるというのが実態ではないかと思います。ただ、そういうのも含めて、いかに新しい試みをするかというのは非常に重要だと思っているのです。

話を戻しますけれども、森林というのは、まず民有林の場合ですと特に個人資産でもあると同時に社会資本でもあるということがありますと、当然そこに所有権と、それからそういう利用権なり経営権があるわけです。ところが残念ながらそれがどうも一致しないといいますか、うまくかみ合っていない面が多いのではないかと思っています。経営意欲はあっても森林を持ってない人がいる、あるいは所有はしているけれども、もう放棄してい

て経営する気がない人もいる。そこに同じように一律に税金を投入するのかとか、行政がどう関与するのかというのは非常に難しい問題かなと思っているのです。

やはりそういう意味では、最終的には所有権と利用権の分離ということも考えなくてはいけないかなと私は思っています。やはりやる気のある者がどんどん経営する。所有権はありますけれども、ある程度その利用権を制限するようなことも必要になってくるかもしれない。ちょうど吉野林業がそうです。借地林業と昔言いまして、不在者地主になっていました。今もなっていますけれども、経営と所有が分離している状況があったわけです。

ところが残念ながらそれが今機能していないような状況ですけれども、これを改めて現代風にアレンジといいますか、機能させなくてはいけない。経営と所有をいかに行政が間に入ってコーディネートできるか。行政はどうも皆さん、皆さんと言ったら失礼かもしれませんけど、どうしても金を出せというほうにいってしまうと思うんですけれども、金よりもコーディネート力を私は期待しているんです。いろいろな異文化、異業種とか、あるいはそういう川下・川上というのをつないでいく役割が行政にとって最も大きな使命ではないかと思っています。そのほうがお金もかからないで、多分、県も喜ぶのではないかなという気もします。

近くの山の木で家を造る地域材住宅という運動もしかり。結局、いかに川下と川上をつなぐか。そして木質バイオマスもそうですし、全部、だれとだれをつなぐかという問題です。森林所有者と単純にユーザーをつなぐといったら無理なんです。その間にだれが入るべきか。その技術者はだれかとか、そういう問題が絡んでくるので、これからぜひいろいろな人をつないで、それをうまく機能するように動かす役割を私は行政に期待しています。

（三宅さん）

ありがとうございました。ちょうど先程日比さんからもネットワークのお話がありましたけれども、何か今後の発展への隠されたキーワードがあるのかなと、思いました。

残念ながら時間になってしまいましたので、会場からの質問はこれで終わりとさせていただきます。本当に貴重なご意見をおふた方からいただきました。ありがとうございました。そして本日のパネリストの皆様に貴重なご意見をいただきました。どうぞ皆様、もう一度大きな拍手をもってお送りいただきたいと思います。本当にありがとうございました。

（拍手）

（司会者）

どうもありがとうございました。それぞれの立場から元気な森林をつくるためにどうすればいいのかというお話をお伺いして参りました。以上をもちまして本日のシンポジウムを終了させていただきます。県民の皆様の理解と協力を得て、県民全体の財産である森林が守り育てられることを期待致しまして、本日のシンポジウムを終了させていただきます。

（終　了）

＜奈良県トップページ＞「紀伊山地の霊場と参詣道」世界文化遺産登録記念シンポジウム